



2019年4月 No.48

発行 地域生活ケアセンター
小さなたね
【医療法人にのさかクリニック】

昨年3月までは病院勤務で、耳鼻科とN-ICOに勤めていました。前勤務先で関わった方達もいて、お家での様子を感じることができます。これからもご利用者様と共にたねで過ごす時間を楽しみにしています。

どうぞよろしくお願いします。



今年も「春」が来ましたね。

「ひんなに重い病気や障がいがあつても、地域の中でも暮らしたい」。これが、当初から掲げてきた小さなたねの理念です。しかし、理想を描いて追い求めて、思うような形やスピードでなかなか進まない状況ではあります、これがらも「地域の中での暮らし」を大切にし、今できる取り組

イズされた集団では、社会の中での個人は全く見えなくなり、関係性も乏しくなってしまいます。そうではなく、「〇〇さん」として生きていくためには、「住まい方」は非常に大切です。そうした「住まい方」の具体的な提案を始めます。

これから小さなたねは、地域生活における「ケア」と「応援」をします。

地域生活の「ケア」と「応援」

所長 水野 英尚

みから始めたいと考へています。

コンセプトは「はたらき」と「住まい」です。

地域生活ケアセンター小さなたねは、2011年4月の開所から8年となりました。当時まだ小さかった子どもたちの成長した姿は、その月日の経過を感じさせてくれます。また、今年2月には、にのさかクリニックの横に新拠点が誕生し、「新生たね」として歩み始めています。そして、5月からはこれまでの場所（梅林）を「地域生活応援たねプラス」として、主に成人期（18歳以上）の方たちの活動を開くことになっています。

「ひんなに重い病気や障がいがあつても、地域の中でも暮らしたい」。これが、当初から掲げてきた小さなたねの理念です。しかし、理想を描いて追い求めて、思うような形やスピードでなかなか進まない状況ではありますが、これがらも「地域の中での暮らし」を大切にし、今できる取り組



小さなたねの物語が描かれたステンドグラス（ガラスアート TAKAMI 製作・寄贈）



中村祐子（看護師）



医療法人にのさかクリニック
地域生活ケアセンター 小さなたね

〒814-0172 福岡市早良区野芥4-19-31
電話 092-834-8090 FAX 092-834-8091
E-mail : chisanatane@tune.ocn.ne.jp
ホームページ : <http://chiisanatane.com>

後記

大好きな姑が亡くなった。余命宣告から入院までの半年、親しい人に会い、身辺整理をしながら、興味ある本を買い、習い事を続け、選挙演説を聴きに行くなど、一人での暮らしを変わらぬペースで全うした。風邪っぽさを「風邪ではなく、がんの悪化」と告げる医師に、「避けられない大事に対して、たとえ短い余生でも恐れおののいて暮らしたくない。『風邪かな、寝不足かな』と単純化して軽やかに生きたい」と思いを伝えていた。「こうなってもいつものようにしか生きられないんです」と。いつもを大事に生きた人だった。(E)

たねのスタコラ ツフ

そこで笑ったのかは……？



清山 浩司（介護スタッフ）

2018年8月から介護スタッフとして加わりました。この文章を書いている時点で、8ヶ月が経ちましたが、まだまだ慣れなことが多いです。

以前も障がい者福祉に携わってはいたのですが、小さなたねに勤めだした当初、目の前にいる利用者さんたちと「どう関わっていけばいいのだろうか」と、傍らに正座して呆然としていたことをまだまだ新鮮に覚えています。また、新しい職場で、他職種の方々と一緒に働くのも初めてでしたので、その緊張も加わり、なかなか自分なりの関わりを見つけるのが難しいと感じる日々でした。

そのような中、転機が訪れたのは、勤めだして2ヶ月が経った頃でした。その日は子どもさんが多く、子ども向けの歌がよく流れっていました。その日、ある利用者さん（Aさん）の傍らで、相変わらずまだどうしていいか分からない状態でしたが、とりあえずその流れる歌を口ずさんでいました。Aさんは、スタッフの声掛けに時々笑うこともある、という印象で、自分もどうにか笑ってもらえないかなあと思って、小声でその歌の適当な替え歌を考えて歌ったところ、Aさんが笑ったのです。そのとき、傍にいたスタッフから、「Aさん、清山さんの声を覚えたみたいですね」と言ってもらい、そこから何か掴んだような気になりました。その日から今日まで、この路線でなんとかかんとか居させてもらっている気がします。

ちなみに、その替え歌とは、「ロールパンナは、メロンパンナの、おねえちゃん♪」→「ドキーンちゃんと、しょくばんまんが、いい感じ～♪」でした……。

何卒よろしくお願ひいたします。



1980年代、学校に行けなくなつて次第に社会との接点を避けようになり、自宅の自室からも出なくなる「ひきこもり」の子どもの増加がクローズアップされました。そして、今日では「8050問題」という、当時10～20代だった若者が30年の時を経て40～50代となり、その親が70～80代となつても長期間ひきこもつてじる状態が続くような、親子の孤立化が深刻な課題だと言われます。

当時の社会常識は、学校や企業も画一化され、人と違うことには、いけないと教えられてきたように思います。子どもたちは寂苦しさを感じ、「常識」というレールから一度でも外れてしまえば、学歴重視、履歴書社会の中では安定した職業に就くことはできないのだと、若者たちに見えない重圧がのしかかっていたように思います。

子どもたちが親元を離れ、「自立」していくことは、自分で収入を稼ぎ生計を作り立たせることであり、自分の住まいを確保し、社会人として世の中に参与していくこと

を、「自立」とすることが多いようです。しかし、「自立」の「自」を「自分」（＝個人）と捉えることと、一人で出来ることや達成したことと、「自立」の姿とすれば、「自立」の先には「孤立」があるのではないかでしょうか。

私たちの暮らしを成立させしていく上で、どれだけのことを自分で出来ているかでしかるべきか。毎日の食物、着ている服から、暮らしの中の至る所に、私たちはその名前さえ知らない人たちの働きにより、日常の生活を成り立たせていると言えます。つまり、「自分で」と言ったときのそれは、いかに多くの関係性の上に成り立つた「自立」であるのかを感じ取ることが大切です。

つまり、本来の「自立」とは、「一人で立つ」とことでもなければ、「自分が立つ」とことでもありません。繰り返しますが、社会は様々な関係性によって成立しているのであり、一人の「自立」を考えることは、繋がりのある、あの人のこの人の「自立」と深く関係していることになります。もし、「彼は自立できない」と揶揄してしまえば、私と彼は何の関係も無いと言つていいことと同じです。そうした、「自立できない」とするその対象は、繋がりが絶

小さなたねの新拠点！

2019年2月、地域生活ケアセンター
小さなたねは「にのさかクリニック横」
(野芥)へ移転しました。



これに伴い、「たねカフェ」のランチ
は「みんなのキッチン」に引き継がれ、
毎週水曜（第3水曜除く）・金曜にランチ
提供を行っています（要予約）。



“地域生活応援たねプラス”がスタートします

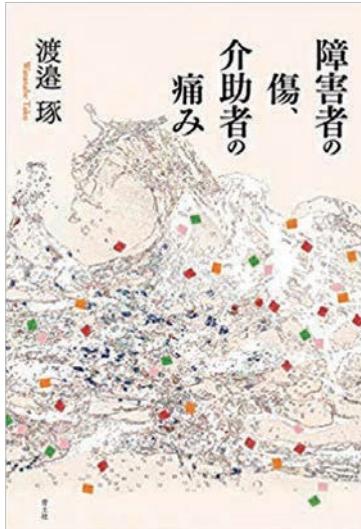
5月より、これまでの梅林の場所を再始動いたします。
こちらは主に成人期（18歳以上）の方たちが過ごせる空間
として活用します。

そして「たねカフェ」は、ランチ調理を「みんなのキッチン」へ譲り、ゆったりとコーヒーが楽しめるカフェとしてリニューアルオープン！この場所が、青年たちの「はたらき」の場となることも計画中です。

今後は、彼(女)たちの地域生活を応援し、新しい彩り
を“プラス”していくことを目指します。



オススメ 本



渡邊 琢著
(青土社／2200円+税)



渡辺 一史著
(ちくまプリマ－新書／880円+税)

『なぜ人と人は支え合うのか 「障害」から考える』

映画化もされ話題となつた『こんな夜更けにバナナかよ』の出版から15年。「人が人を支え合う」という社会の根幹に関わるテーマを、障がいのある人の暮らしから、見えてくるものとして描かれています。



ぶらりとお花見に出かけました。

私たちは誰も「孤立」しない社会を目指し、私もある人やこの人、この子の「自立」を受けとめ、繋がり合えることを喜べる」ことが、障がいや病があつても、年老いて衰えても、あなたは「」で生きていいのであり、あなたの存在が私を確かなものにしていくというような、相互扶助の関係を築く働きこそ、これから時代に必要とされます。小さなねの彼(女)たちと共に歩み出したいのです。

たれ「孤立」した状態であることが多いのです。ですから「自立」を支援するといながら、結果的に「孤立」を生み出してしまうことにならないか注意が必要です。

小さなねを利用している青年たちは、その障がいの重さゆえに、「自立」などと考へる機会は非常に少なく、家族や支援者にとっても「そうしたことを話題にする」とすら無いように思います。しかし、「孤立」をさせない取り組みが、「自立」に繋がることであり、さらにそれは個人の「自立」のことだけではなく、そこに繋がる一人一人の「自立」に関連していることとするなら、彼(女)たちの「自立」は非常に重要なテーマであり、社会の中で生きづらさを抱えている人たちの処方箋になるかもしれません。

障がいのある子を持つ親たちは多くは、常に「親なき後」という課題を抱えて過ごしていることでしょう。時として、それは受け入れてくれる「施設」が、親代わりとなり、ケアをしてくれ、こうした「場所」があれば解決とされます。しかし、それでは「ケアする主体」が代わっただけで、「人が生きる」という根本的な課題には、目を背け続けたままであると私は思います。

『障害者の傷、介助者の痛み』

「日本自立生活センター」や「ピープルファースト京都」で、障がい当事者の「自立」を介助者として、コーディネーターとしてサポートし続けている著者は、当事者の「傷」は時として暴力的言動や感情の爆発が起こる、それを受けとめる介助者たちの「痛み」といふ、双方が顧みられなければならないという。